

# 一読総合法による読解指導のうちの 話し合い活動について

教材 「ちからたろう」（東書 3年）

足利市立西小学校 河 内 忠 之

話し合い活動とは、児童のひとりひとりが物語に体あたりをして、感じたこと、わかったことをもとに、学級全員が参加して行なうものである。

そして、物語に対する自分の考え方や感じ、経験を出し合って、みんなで共同思考し、読みを確実にしていこうとすることをねらったものである。

だから授業における話し合い活動以前には、その母体となるべき書きこみ作業が行なわれなければならないわけであるが、そのことについては前に述べられているので、ここでは省略させていただきます。

実践例をあげるまえに、話し合い活動に関する事項について簡単に説明をいたします。

## 1 話し合う内容について

何のために話し合うのかといえば、読みを深めるため、読みを確実にするためであるから、対象となるものは、文章表現されたものである。

- (1) 表現された文（ことば）を具体的に言いかえる。短くまとめる。
- (2) 主題について話し合う。
- (3) 作中の人物の考え方や行動について話し合う。
- (4) 感想や意見を発表する。
- (5) 読みを進める上に必要な、こそあどことば、つなぎことば、語句などが、話し合いの中に取り上げられる。

## 2 話し合うためのルールについて

話し合いにより共同思考を行なうのであるから、一人一人が勝手なことを口にし、話題から離れていったのでは、その目的が達せられない。

そのため、一人一人の発言を生かしながらも、全体として一つの話題に集中し、クラス全員の読み、考え、感じ方などが高められるように、話し合う上の約束を決めておく。

そして、一人一人の発言を、みんなで聞いてやることが、全員参加のたてまえとなるのである。発言後の「さんせい」「はんたい」ということばだけでも、発言者にとってはうれしいものである。

また、できるだけ、まえの人の発言をうけて発言させるようにさせる。

たとえば、

- (1) ○○さんにつけたして……
- (2) ○○さんとちがって……
- (3) ○○さんの意見を聞いて思ったこと

- (4) ○○さんに質問 .....
- (5) ○○さんと同じですが、少し短かくして .....
- (6) ○○さんに一部賛成 .....

また、聞く人に、話し手の言わんとすることがよくわかるように、まえおきをしてから発言するようになる。

その例をあげてみると、

- (1) わかったことをいいます。
- (2) わからないこと .....
- (3) こそあどことば .....
- (4) 予想
- (5) 感想
- (6) だいじな文

以上のような話し合いのルールを決めて発言させることは、他の児童の意見をよく聞くという態度が養われるばかりでなく、思考力、表象する力、関係づけをする力などを高めるのに有効である。

しかし、話し合いのルールを決め、文章表現されたものについて話し合うからといって、すきなことを勝手に話し合わせるのでは。教師は、子どもたちの発言の機会をうまくとらえて、その時間のねらいは、きちんとおさえていくのである。

ここに示すのは、全授業の一部ですが、これによって、少しでも授業の様子がわかっていただければ幸いです。

### からたろう（一部）

むかし、ある村に、男の子が生まれました。どうしたわけか、その男の子は、いつまでたっても、立つことも話すことできません。親たちは、たいへん心配しましたが、どうすることもできませんでした。しかたがないので、その子をかごの中に入れたまま、そだてることにしました。

ちょうど、その男の子が生まれて、15年目の朝のことです。かごの中に入っていた男の子が、とつぜん大声を出して、そばにいた父親にいました。

「おとうさん。わたしに、百かんめの鉄のぼうを買ってきてください。」

父親は、男の子が急に口を開いたので、びっくりしました。母親もおどろいて、かごのそばへかけよると、

「まあ、おまえ。ほんとうに話ができるようになったのかい。」  
といいました。

① 父親は、町のかじ屋へ行って、百かんめの鉄ぼうをちゅうもんしました。いく日かすぎて、百かんめの鉄ぼうができあがりました。父親は、村のわかい人たちを15人ほどたのんで、やっと村までかついで来ました。

なお、この時間に、教師の意図したところは、次の点です。

1 題名についての話し合い。

2 くわしい言いかえ。

(1) かごの中に入れて育てる様子を絵にかくとしたら、どういう絵ができるか。

(2) 親たちの子どもに対する気持ちは、どんなだろうか。

3 みじかい言いかえ。

(1) この段落に小見出しをつけたら、どうなりますか。

4 予想

(1) 題名からの予想

(2) 「ちからたろう」と「男の子」の関係についての予想

(3) 話のすじに関する予想

○ 男の子は、どうなるだろう。

5 感想

(1) 男の子の立場に自分をおきかえたときの感想。

(2) 両親の立場にたっての感想。

## 展開例

ここに示す話し合いの内容は、その一部であり、文中の「児」とは、児童の発言を示す。

また、「教」とあるのは、教師の発言を示す。

### 〈題名読みと予想〉

单元名（物語を読む）と文題（ちからたろう）を読み、話し合いにはいった。

（文題からの見通し、予想については、別項を参照ください。）

児A 「ちからたろう」という物語を読むのだということがわかります。

児B それで、その主人公が、「ちからたろう」だと思います。

一同 いいです。

児C Bさんと同じで、その人は、上の絵の人だと思います。

児D つけたして言います。この「ちからたろう」が、何かよいことをする話だと思います。

児E 絵本にある「ももたろう」と同じような話だと思います。

児F やっぱり、むかしの話だと思います。

児G ちからもちで、きっと悪い人をやっつけたりする話だと思います。

教 「ちからたろう」という物語を読むのだということで、先へ進んでいいですか。

一同 いいです。

◇ B児のように、題名読みから主人公の予想が全員にできている。また、E・F児のように、むかしの話らしいということもつかみとれている。G児の発言は、主人公は善人だという、今までの読書経験と結びついていると考えられる。ここまでで、児童全員に、「ちからたろう」に注意しながら

ら読みを進めればよいのだという、読みの姿勢がつくられた。

### <本文①について>

本文①を指名読みさせた後、書き込みをし、話し合いにはいった。

ここで、区切ったのは（立ちどまりという）総合法では、1回しか読まないのであるから（三読でないという意味）読む部分を短くし、共同思考によって読みを確実にするためにである。そこに、読み手のつぶやき、ひとりごとを出し合い、推測だけで考えられていた語りを確かめたり、感想や意見をくらべあわせたりしながら読みを深め、思考の力をのばそうと意図して立ちどまりをさせるのである。

児A わかったことを言います。この物語は、やっぱりむかしのものです。

児B Aさんにつけたして言います。ある村でおこった話です。

教 「ある村」というのは、どこでしょう。

児C どこでもいいと思います。

一同 いいです。

教 そうですね。むかしばなしによくある言い方ですね。別にどこときまってなくもよいのです。

右のようにして、この物語の時代と場がおさえられた。その後、主人公と思われる「ちからたろう」が、この男の子か、それとも、別の人かということが話題になった。

児A 「ちからたろう」は、男の子とちがうと思う。いつまでたっても口をきくことができなかつたり、立つこともできないのではおかしい。

児B わたしは、Aさんとちがって、この男の子が、ちからたろうだと思う。わけはよくわからぬけど……。

児C ちょっとおかしいのだけど……。ぼくはこの男の子が「ちからたろう」だと思う。でも、生まれたときから力があれば、そういう名まえをつけてもいいけれど、立てないので、ちょっとへんにも思います。

児D Cさんのことについて。でも、生まれてすぐ力がある子どもなんていないと思います。大きくなつてから力がつよくなつたのではないですか。

児E Dさんにつけたして。だから、あとになつて、「ちからたろう」と名まえをつけたのだと思ひます。

児F わたしもBさんやEさんと同じでこの「男の子」が、「ちからたろう」だと思います。そのわけは、この「男の子」が主人公だから、生まれたときの様子からくわしく書いてあるのだと思うからです。

◇ いろいろだされた議論も、F児の意見が圧倒的支持を得て、一応のまとめとして、「ちからたろは、この男の子らしい」ということで、読みを進めることになった。このような読みとり方の異同は大いに取り上げて扱うべきである。こうして意見や読みの深浅を統一し、つぎの部分の読みにはいる。このことが、以後の読みをより意欲的にする。このような問題は、先へ読みを進めるうちに、おのずと解決できる問題であるので、わたしは急いで結論を出さないことにしている。

また、前出C児の疑問を扱って話し合いを進めるうち、「男の子」の気持ちについて話が移っていった。

児A 思ったことを言います。「いつまでたっても、立つことも話すこともできません。」とあるでしょう。赤ちゃんと同じだと思います。

児B いつになっても、口がきけなかったり、話ができなくては、おとなになってかわいそうだ。

児C その子は、ずっとねたきりだと思います。

教 どうして。

児C 立つことができなかつたから、そうだと思います。

児D かごの中にはいったきりで育てられるのではかわいそう。

児E 「かごの中に入れてそだてることにしました。」というところを読んで、ぼくたちは、しあわせだと思いました。

◇ このE児の発言に対し、全員賛成

児F わからないこと。「いつまでたっても」というのは、いくつぐらいですか。

児G 三つか五つぐらいと思う。

児H もう少し。七つぐらいまでと思う。五つぐらいで「いつまでたっても」というのはおかしいと思います。

児I Hさんのことで。「いつまでたっても」というのは、もっと大きくなるまでかもしれない。

教 それは、少しあとの問題にとっておきましょう。

◇ ここで、話題の転換をはかり、ついで、両親の気持ちについて話し合った。

児A 「親たちは心配した。」というところを読んで。うちのおかあさんなんか、わたしがかぜをひいても心配するのだから、このおかあさんは、うんと心配したと思った。

児B そのことについて。「親たち」というのは、両親だけでなく、親のほかの人もいると思います。

児C 思ったことをいいます。今のように医者がいなくては、まだ心配するだけだったでしょう。

児D つけたして言います。どうして育てていいかわからなかったと思います。

児E つけたして。いろいろな方法でおそうとしきれども、だめだったのだと思う。

児F Eさんにつけたして。おかげ入てたのんやりしたかもしれない。

ほとんどの児童が、「心配しましたが」の「が」を、「反対のつなぎことば」という表現でとらえていた。

A児やF児のように、本文を読んで、自分の経験を想起する児童もかなりみられた。

児A 思ったこと。「しかたがないので」というのは、もうなおらないのではないかと思ってあきらめたのだと思う。

児B いくら親でも、いろいろやってみてなおないと、やっぱりあきらめると思う。

などと、表現のしかたはうまくないが、両親がいろいろと心配をし、手をつくしたこと。何のいないのでどうしようもなくしかたなしに、かどに入れて育てることにしたという心の動きが読みとれたと思う。

このあたりは、ただひとりだけの読みで進んでしまうと気づかずに終ってしまうのではないかだろう。話題になったがために、ばくぜんとしていたものが、はっきりとしたり、今まで気づかずにいたのも救われたと思う。

ここで①の部分をまとめ、それをもとに、「男の子」を中心とした家の中の様子、両親の様子をテレビにうつしたら、どんな絵がうつるかを考えさせてみた。

教 それでは、先生がゆっくりとここまで読んでみますから、「男の子」の家の中の様子や、両親の様子、「男の子」の様子などを頭のテレビにうつしてみよう。

教 読む

児A 「男の子」は、かごの中にはいっている。かごは、絵のように竹でつくってあると思う。

児B 男の子より、かごの方がずっと大きいと思う。そして、中には、ふとんがはいっている。

児C 男の子は、きものを着ている。

児D Cさんにつけたして。きものというより、はんてんのようなものをきていると思う。

児E 頭は、ぼうずだと思う。

教 では、両親の様子はどうだろう。

児F おかあさんは、さいぼうをしている。おとうさんは、わらじをつくっている。

児G ちょっとちがって。おかあさんは井戸の方でせんたくをしている。おとうさんは畑で働いている。

児H Bさんと少しちがって。二人とも男の子のまわりで、困った顔をしてすわっている。

教 家の中の道具について、絵ができる人はいませんか。

児I あんまりいろいろ道具がなくて、うしろの方にたんすがおいてあるだけ。

児J 電気じゃなくて、ランプがさがっている。

△ A・B児のように、本文の冒頭の部分にある「ある村」ということばが、生かされた農村の人が行なう仕事がとりあげられている。また、I・J児のような家がまずいという考えが多いのは、家

が裕福ならば、病気などもある程度なおせるという現代っ子の考えが反映されたものと思う。

以上、主人公・両親の気持ち、場面や情景もある程度つかめたので、この段階のまとめをさうと考え、次の話題にはいった。

教 こここの段落に小見出しつけるとしたら、どういうのがよいでしょう。

児A かわいそうな男の子

児B 口のきけない、立てない男の子

児C 両親と口のきけない男の子

◇ 大多数がA児のようなものであった。

教 では、「ちからたろうの……」とかいたら(板書)あとをどう続けますか。

児D 「ちからたろう」のたんじょう。

◇ と、小見出しが、かえられた。

以上述べたように、話し合いが進められたわけであるが、その間には、こそあどことばに関する内容や、むずかしいことばについての話し合いも行なわれたわけである。ここにそれをつけておきます。

たとえば、

<こそあどことばに関するもの>

児A こそあどで、「その男の子」というのは、ある村に生まれた男の子のことです。

一回 いいです。

児B 同じく、こそあどで、「その子をかどの中に入れたまま」の「その」は、生まれた男の子だと思います。

児C Bさんとちょっとちがって、立つことも話すこともできない子のことだと思う。

児D わたしもCさんの方がいいと思います。

◇ このように、指示語についても、共同思考していくことを常に行なっている。

また、語句の扱いも、辞書的なものではなく、あくまでも文に即して理解させ、言いかえ作業を多くとり入れて、ことばのニュアンスまでも、はっきりとわからせるように心がけている。

以上のような内容について授業を進めたあと、本文①の朗読読み(別項参照)の練習をした。そして、この先、この「男の子」はどうなるだろうと予想を立てさせてから、本文②のところへはいった。

このような授業展開をすると、全児童が喜んで参加するが、問題点もある。それは、

- 1 話題が焦点化されず、単なる話し合いに終わってしまう。
- 2 児童は、聞き手よりも話し手になりたがる。
- 3 発言が分かれたとき、どうしても結論を急ぎすぎる。
- 4 児童ひとりひとりの問題点を、教師がすばやくつかむことがむずかしい。  
などである。